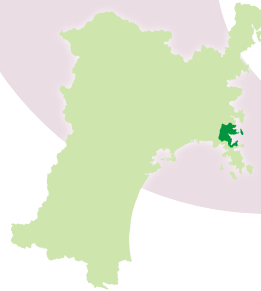


わがまち自慢

町長室から



宮城県女川町
須田 善明 町長



女川町民の「立ち上がる力」の強さ

これまでの復興の歩みのなかで、本場に大きな力となってくれたのは、女川町民の「立ち上がる力」です。女川町の人々は、あれだけの災害があつて、その中でどうするかとなつたときに、「誰かが何とかしてくれる」ではなく、「自分たちで前に進まなければならぬ」という意識はとても強かつたと思います。

そのような意識を町民のみならずが持つていたおかげで、こまごま復興を進めてくれることができた。今、何をしなければいけないか」という役割認識、「どこに向かわなければいけないか」という大きな方向性を、町民同士や

行政側も共有してきたからこそ、官民協働で復興に取り組むことができたと思います。

外部からのNPOやボランティアの方々とも、うまく連携できたのも、大きな力になりました。最初は支援する側、される側の関係だったのですが、やがて「一緒にやっていたいけるパートナー」、「この場所でも自分も一緒に再スタートさせたい」と思つて外から支援に加わつていただけの方々が多かつたのはたいへんありがたかつたです。また、外部の方々にもそのように思つていただけるような「熱」を持ちながら行動し続けてくれた町民の皆さんを、非常に心強く思いま

す。外部から支援に加わつていらっしゃる皆さんも、女川町で事業を始めた方、女川町のファンになつて休日遊びに来てくれるなど、様々な

女川町民が持つ商人としての精神

行政体としての女川町の区域は、明治の女川村の頃から変わつていません。そのためか、地域への帰属意識は合併が繰り返されてきた地域と比べて強いと思います。自分が生まれ育つた土地で、上の世代がやつてきたことをよく見てきたと思つて、自分たちがプレイヤーになつた時にどう行動すべきかをわかつています。また、それを次の世代に伝えていくような風土もできあがっています。

女川は元々小さい漁村でしたが、民間業者が港の埋め立て工事を行ったことがきっかけとなつて企業集積が始まり漁港が発展してきた経緯があります。また、カツオやサケ・マスなど遠洋漁業が中心だった時代から、200海里規制を経て、現在はサンマが漁業の主力となつているのも、もとはひとつの事業者が魚体の選別機を導入したのがきっかけです。選別機の導入によつてマーケットニーズに合ったものを出荷できるようになり、その事業者が軌道に乗るのを見た他の事業者も参入して、サンマの一

関わり方をしてくれてます。そういう外部の方々を受け入れられるのも、女川町民の良さでしょう。

大水揚げを誇る漁港にまで成長してきました。このように、時代の変化に対して、個人レベルでも、地域全体としても、変化を恐れずにチャレンジする気風がある地域なのです。そういう意味では、女川町は単なる漁業のまちではなく、水産業のまち、商人のまちです。このような歴史に育まれた風土も、女川町の人々の「立ち上がる強さ」の根底にあるのではないのでしょうか。

女川町の人々の商人としての精神は、水産物や加工品の美味しさにも通じています。女川で水揚げされたサンマを贈ると、多くの方に「こんなに美味しいサンマは初めてだ」と言つていただけます。このように言われる所以は、女川の業者さんの「出荷するからには恥ずかしいものは出せない」というプライドです。プロの目で選別して、良いもの

大震災直後の女川町 (2011年3月)



大震災後の女川町中心部 (2011年8月)



「女川町商店街復興祭」の開催 (2012年3月) サンマの水揚げ風景 (2012年12月)



商工会有志で立ち上げたコンテナ村商店街 (2011年8月)



木造仮設店舗「きぼうのかね商店街」をオープン (2012年4月)



トレーラーハウス宿泊村「エルファロ」オープン (2012年12月)



「復興まちづくり女川合同会社」による「女川プランニングプロジェクト」の調印式 (2012年9月) [女川町提供]



観光客に人気の「女川丼」



第41回宮城県水産加工品
品評会で受賞した水産加工品
[女川町提供]

上左:「御膳蒲鉾かき」
左奥:「たこのやわらか煮」
左手前:「ほやたまご」

復興を通じてまちに新たな価値を

をきちんと取引しています。ですから、ぜひ安心して女川のサンマを味わっていただきたいですね。

サンマだけでなく、女川の特産物はやはりどれも美味しいです。水産加工品のほうも力を入れて取り組んでいます。第41回宮城県水産加工品評会では、そのトップ3を女川町の加工品が受賞しました。最優秀賞にあたる農林水産大臣賞を高政さんの「御膳蒲鉾かき」、宮城県知事賞を鮮冷さんの「たこのやわらか煮」、マルキチ阿部商店さんの「ほやたまご」が受賞しました。事業者さんの加工技術も高いです。ぜひ、女川の水産加工品も食べていただきたいですね。

これまでの復興事業では、駅前
の商業エリアを中心に整備が進ん
できました。海側・山側の全ての
エリアが整備されるのは約2年半
後になります。今回のまちづくり
では、どうしたら「街の活力」、「新
たな人の流れ」を作ることができ
るか、どうしたら「ここに生きる
人々のポテンシャル」を引き出せ
るか、ということを考えて取り組
んでいます。まちに新しい価値を
付与させたいのです。

例えば、駅前から海に向かうレン
ガみちは、その延長線上から初日の
出が昇ってくるように設計させま
した。今年は、初日の出を見るため
に約600人が集まりました。嬉
しかったですね。もちろん、そのた
めだけに作ったのではなく、この場
所の価値のひとつにすぎません。こ
こでファッションショーやミュー
ジカルも開催しています。このレン
ガみちは、道であり、ステージであ
り、「空間」であり、「場」なのです。
駅前の商業エリアには、レンガ
みちを軸にイートイン、クラフト
体験教室、ギャラリーなど多種多
様なテナントが入っていますが、
テナントが提供するコンテンツだ
けでなく、イベント等をきっかけ
に人が集まり、町内外のプレイヤ
ーの目に留まることで「女川って
いいよね」と注目され、多くの方々

が駅前の商業エリアを活用して
くれるような「場」づくりを目指し
ています。我々がイベントをや
り続けると疲弊してしまいがち
そうではなく、こちらがサポート
する側となって町内外のプレイヤ
ーに空間をうまく使ってもらえる
ような仕掛けづくりをしていき
たいと思っています。住んでいる
方々、訪れた方々に「この場を好
きに使っていいんだ」と思ってもら
える空間にしたい、それが根幹
にある思いです。

今回のまちづくりのもうひとつ
のテーマは、「海と人々の生活を
近づきたい」ということです。我々
は海のそばに住んではいますが、
日本では多くの場合、海はあくま
で仕事場なんです。ですから、海
辺に佇んで、その空間や時間の流
れを楽しむような場所や習慣が、
これまでの女川町にはあり
ませんでした。それが自然
に生まれてくるような場を
作っていききたいという、以
前からの思いを復興に投影
しています。

す。まちづくりは、まだまだこれか
らです。現在は「復興」という点で
注目されているかもしれませんが、
10年後にはそのような点で注目さ
れることは無くなっているかもし
れません。今の「復興」を通じて、
住んでいる人、外部からやってく
る人の活力を引き出せるようなま
ちづくり、新たな人の流れを作っ
ていくことが重要だと思います。

女川町からポジティブなメッセージを発信

女川町の人々の、どんな苦しい
状況でも前を向いて進んでいく力
は、やはり他には負けないものが
あると思います。先の震災の記憶
を風化させてはいけないという声
もありですが、我々がそのことば
かりを気にかけているわけにもい
きません。震災の記憶というのは、
一般には、悲しみ、凄惨さ、自然
の脅威などだと思いますが、女川
町が伝えていかなければならない
のは、「いかに立ち上がってきた
か」、「どんな状況であっても、も
う一度立ち上がることができる」

ということだと思います。
先の震災では、当たり前前
に思っていたことを一瞬で無くして、当
たり前がいかに脆いものであるか
を知りました。それでも、また新
しい当たり前を作ろうとしてやっ
てきています。それもいつ失われ
るか分からないのですが、「そ
れでも立ち上がるんだ」というポ
ジティブなメッセージを発信して
いける場所が、ここにあります。
ぜひ一度、女川町を訪ねてみてく
ださい。心からお待ちしております。
(談)



イベントなどで内外の人々が
自由に使える空間となってい
る駅前のレンガみち



2016年12月にオープン
した水産物を中心とした物
販飲食施設「ハマテラス」



駅前から海に向かうレンガみち